

白川勝利で 四国から 野党連合政権の扉を開こう

日本共産党

衆議院比例四国・名簿登載予定

白川よう子



22日は、愛媛県東予地区を駆けめぐりました。
今治市で街頭宣伝、つどいをおこない、来年2期目に挑む松田澄子市議が決意表明。
新居浜市では党創立98周年のつどいに参加。秋の上島町議選、西条市、四国中央市両市議選の予定候補が挨拶。白川さんは「全てに勝ち抜き、総選挙勝利に繋げよう」と訴え、これからどんな社会をつくっていくのかを語りました。このつどいで入党者を迎えました。
夕方は四国中央市でつどいをおこないました。



27日、四国4県女性後援会
会長・事務局長会議がオンラ
インで行われました。

2年前の7月、義兄は旅立った。進行性筋ジストロフィーという難病を抱えながら、最後まで気管切開もせず65歳まで自宅で生き抜いた。35年ほど前に姉と結婚を決めた時、医師から「10年もちませんよ」と言われた言葉を「うそつきやな」と家族中で笑った日々が懐かしい。

義兄は物静かな人だったが、療養していた病棟で「患者会」を立ち上げたこと、筋ジストロフィーであるがゆえに経験してきた出来事をいろんな場で語ってくれた。研究のためだと有無を言わずお尻の筋肉を採取され、「失敗した」ともう片方のお尻にもメスを入れられた。痛くて上向きで寝られない日々が続いたことなどは序の口で、「患者の権利」はかけらもなかったことなどだった。私はそんな話を聞いて「理不尽だ」と煮えたぎるような思いを覚えたが、彼はそんな感情は微塵も見せなかった。

先日、義兄の3回忌を迎えた。姉は『青春の架け橋』ある筋ジストロフィー症の青年の決意』という本（私も時おり登場する）を出版し、彼の思いを筋ジストロフィーと闘い続ける患者さんたちに伝えている。

たくさんの皆さんに支えられて、「最期をどう生きるか」を自分の意志で迎えた義兄の「生」から、私はたくさんのことを学ばせてもらった。これを自分の「生」にどう生かしていくかが、彼の「生」を受け継いでいく唯一の方法だと感じている。

よう子記